鞠智城跡（きくち）「特別研究」成果報告会

―― 発表レジュメ集 ――

平成26(2014)年

3月8日(土)

10:30～16:10 (受付は10:00～)

くまもと県民交流館パレア・パレアホール

主催：熊本県教育委員会　共催：熊本県文化財保護協会

【講演要旨】

鞠智城西南部の古代官道について

木本雅康

本講演は、歴史地理学の立場から、鞠智城と古代官道との関係について考察するものである。古代律令国家は、全国に「官道」をはりめぐらしたが、それらの道路は、きわめて直線的で、幅の広いものであった。特に鞠智城周辺には、そのような道路の痕跡がよく残っているが、本講演では特に鞠智城西南部の古代官道について再検討を行う。

この地域の古代官道のルートについては諸説あったが、講演者は、筑後国狩道駅から肥後国蠶養駅までの経路について、①狩道駅から三毛・玉名郡家を経由して高原駅へ達するルート、②狩道駅から大水・江田・高原駅を経由する『延喜式』駅路のルート、③大水駅から東行して鞠智城に達し、その付近から南下して蠶養駅に向うルートの３つがあり、いずれも当初から存在していたとする。また、高原駅の位置について、植木の十字路に求める鶴嶋俊彦の説を退け、熊本市北区改寄町小字南ノ割の立石をめぐる方形地割に比定する木下良の説を支持する。その上で、江田駅から蠶養駅までの駅路について復原し、特に植木の十字路を経由することによって迂回路となる木下説に対し、より最短距離となる直線道やそれにともなう地割の存在を指摘する。その結果、近年熊本市北区四方寄町の飛田遺跡群で検出された道路状遺構については、伝路と解釈する。ただし、植木の十字路に高原駅を想定し、そこから南下して飛田遺跡群に達する、鶴嶋が指摘した 9 世紀後半以降の駅路も、これを 8 世紀末から 9 世紀初めまで年代を上げれば、成り立つ可能性もあることを述べる。

一方、7 世紀第４四半期の時点で、大宰府から肥後国府へ行くには、地方豪族の勢力を避けて、肥前国府から島原半島を経由して入っていたとする松村一良の説に対しては、時期的に遅すぎるので成り立たないとし、肥前・肥後の命名は、別路線の駅路における都からの距離によるとする。

【発表レジュメ】

古代肥後における仏教伝来

―百済達率日羅と鞠智城出土遺物を中心として―

有働　智奘

◎はじめに

仏教公伝・・・548年（百済史料）。仏教記事の初出⟹『日本書紀』欽明天皇六年条。

『日本書紀』552年（末法思想）、『元興寺伽藍縁起并流記資財帳』538年（讖緯思想）

百済側の仏教伝法の意図・・・日本への軍事支援の要求に対する贈与、仏教を利用した王権の服属儀礼（冊封）としての伝道　⟶百済の日本への伝道活動は護国思想の一環

＊初期の仏教文化は、どの経路で奈良へ伝わったか。

Ⅰ、八幡信仰から見る百済交流

【史料１】　『隋書』巻八十一「列伝」倭国条

至竹斯國又東至秦王国其人同華夏。（竹斯國に至る。又、東して秦王国に至る。其の人華夏と同じ。）

＊熊本県鞠智城跡から出土した木簡「秦人忍口五斗」

「豊国奇巫」（『新撰姓氏録』和泉国神別天神条）、「豊国法師」（『日本書紀』用明天皇二年条）

【史料２】　『辛島氏系図』

書記曰、素戔嗚尊帥其子五十猛神、降到於新羅國之時、多將樹種而下、然不殖韓地盡以持歸。遂始自筑紫、…〈中略〉…**肥前国西南沖中、五十猛嶋有之也。**或筑前国之御笠郡筑紫神社所祭此之神也、則素尊御別腹之兄御子也、韓国令知給、故於韓嶋之号起也、後以為辛嶋。

（肥前国西南沖の中に五十猛嶋これ有るなり。或は筑前国の御笠郡筑紫神祭れる所の此の神也。則ち素尊御別腹の兄御子也。韓国知らしめ給う故に韓嶋の号起す也、後に以て辛嶋と為す）

八幡神＝秦氏＝新羅系渡来人＝新羅仏教の問題点

⟹百済仏教や新羅仏教の様相を検討して論及されていない。

① 新羅の仏教公伝 ═ 法興王十五年（528）

② 最古の百済寺院・大通寺址 ⟺ 最古の新羅寺院・興輪寺址

③ 新羅の最大国家寺院「慶州・皇龍寺九重塔」の創建（631～647）

⟹新羅の工人ではなく、百済の阿非知を中心に施工。⟹創建当初は一塔一金堂式の百済系伽藍配置

＊従来、新羅独自のように思われた弥勒信仰も六世紀末に百済の弥勒信仰が導入された。

【史料３】『隋書』巻八十一「列伝」倭国条、

無文字、唯刻木結繩。敬佛法、於百濟求得經、始有文字。

（文字無く、唯だ木を刻み縄を結う。仏法を敬い百済に於いて仏経を得んことを求め、始めて文字有り）

八幡信仰・・・九州で勃興した。　**ポイント**　⟶**山岳信仰（修験道）と放生思想**

【史料４】『三国史記』法王二年条（600）

法王二年創王興寺。度僧三十人。大旱王幸漆岳寺祈雨。

（法王二年王興寺を創る。僧三十人を度す。大旱、王は漆岳寺に幸し、祈雨す。）

＊『日本霊異記』に記載される百済僧弘済が中国山地に立てた三谷寺跡（寺町廃寺）

【史料５】『三国史記』法王即位年条（599）

下令禁殺生。收民家所養鷹鷂放之、漁獵之具焚之

（殺生を禁ず令を下す。民家の収むる所の鷹鷂之を放ち、漁獵の具之を焚く。）

【史料６】『三国遺事』巻三「法王禁殺」（開皇十年、590）

下詔禁殺生。放民家所養鷹鸇之類、焚漁獵之具、一切禁止。

（殺生を禁ず詔を下す。民家の養う所の鷹鸇之類を放ち、漁獵の具を焚き、一切禁止す。）

【史料７】『続日本紀』天平九年（737）四月条

遣使於伊勢神宮、大神社、筑紫住吉、八幡二社及香椎宮、奉幣以告新羅无禮之状。

（使を伊勢の神宮、大神の社、筑紫の住吉、八幡二社及香椎宮に奉幣し、以て新羅の无禮の狀を告ぐ。）

・法蓮が宇佐で初めて放生会を執行。法蓮が建立したという寺院から白鳳期の瓦が出土。

【史料８】『日本書紀』天武天皇五年（676）八月条・・・放生会の初見。

詔諸國以放生（諸国に詔して放生せしむ）

一般的に放生思想は八世紀の義浄訳『金光明最勝王経』「長者流水品」によると言われているが、七世紀の玄奘訳『薬師瑠璃光如来本願功徳経』にも「幡を造り、生を放ち、福を修する」。

和銅六年（713）大隅国設置における**隼人の反乱が契機**となり「放生会」を行ったのが始まりという。

＊八幡神は律令国家という古代国家の成立とともに国境の神として登場。

⟹つまり、八幡信仰と鞠智城造営は同様な経緯をもって出現した。

Ⅱ、肥後の仏教伝来

【史料９】敏達天皇十二年（583）秋七月条

詔曰「屬我先考天皇之世、新羅滅内官家之國。天國排開廣庭天皇廿三年、任那爲新羅所滅、故云新羅滅我内官家也。先考天皇謀復任那、不果而崩、不成其志。是以、朕當奉助神謀復興任那。今在百濟、①**火葦北國造阿利斯登子達率日羅**、…〈中略〉…「於檜隈宮御宇天皇之世、我君大伴金村大連、奉爲國家使於海表。②**火葦北國造刑部靫部阿利斯登之子**・臣達率日羅、聞天皇召、恐畏來朝。」…〈中略〉…又奏言「百濟人謀言、有船三百、欲請筑紫。若其實請、宜陽賜予。然則百濟、欲新造國必先以女人・小子載船而至。③**國家望於此時、壹伎・對馬多置伏兵、候至而殺。莫翻被詐、毎於要害之所堅築壘寨矣。**」…〈中略〉…乃遣使於葦北、悉召日羅眷屬、賜德爾等任情決罪。是時、葦北君等、受而皆殺、投彌賣嶋。彌賣嶋、蓋姫嶋也。以日羅、移葬於葦北。於後、**海畔者**言「恩率之船、被風沒海。參官之船、漂泊津嶋、乃始得歸。」

日羅の出自

『先代旧事本紀』「国造本紀」・・・三井根子命が、景行天皇の御代に葦分（アシキタ）国造となる。

「刑部」⟶『新撰姓氏録』「右京諸蕃」「出自百済国酒王也」**＊肥国では部民制が確認（靫部）。**

『肥後国志』「葦北郡、田浦手永」「一説ニ日羅カ故事アル故、久多良木ハ古ハ百済来ト書シト云」

⟹クダラ「キ」とシラ「キ」・・・「キ」は「城」

問題点・・・『書紀』における日羅の記述から仏教関連記事を見出せない。

＊日羅記事の翌年の敏達十三年条に百済請来の弥勒石仏や善慧尼の出家、さらに舎利信仰などが記述され、「仏法の初め、茲より作れり」と記される。

・日羅が百済の上級官僚であった理由　⟶江田船山古墳鉄剣銘「典曹人」と結びつく。

肥後における在家仏教の受容　・・・　最古級の鞠智城址出土の小金銅仏

出雲鰐淵寺持統天皇六年（692）年代銘「銅造観音菩薩立像」

壬辰年五月出雲国若倭部臣徳太理為父母奉作菩薩

（壬辰年五月、出雲国若倭部臣徳太理、父母の為に菩薩作り奉る）

道欣と恵彌

【史料 10】推古天皇十七年（609）夏四月条

筑紫大宰奏上言「百濟僧道欣惠彌爲首一十人・俗七十五人、泊于肥後國葦北津。」是時、遣難波吉士德摩呂・船史龍、以問之曰、何來也。對曰「百濟王命以遣於吳國、其國有亂不得入。更返於本鄕、忽逢暴風、漂蕩海中。然、有大幸而**泊于聖帝之邊境**、以歡喜。」五月丁卯朔壬午、德摩呂等復奏之。則返德摩呂・龍二人而副百濟人等、送本國。至于對馬、以道人等十一皆請之欲留、乃上表而留之、因令住元興寺。

⟶この記事に百済の官僚名は皆無である。・・・筑紫大宰と肥後国の名の初出。

問題点・・・推古紀十七年条は仏教記事にもかかわらず、あまり先行研究がみられない。

① 葦北に漂着した問題

百済僧の漂着場所の推定　→天草西岸、薩摩国（鑑真の漂着）

＊当時の百済において日羅出身地の葦北が日本の窓口の一つとして知られていた。

② 百済僧が帰国を拒否した問題

・鑑真和上と同様な目的で僧侶として布教活動を推進する菩薩道の実践・・・**元興寺への居住**

【史料 11】『扶桑略記』推古元年条

蘇我大臣馬子宿禰依合戰願、於飛鳥地建法興寺。立刹柱日、嶋大臣并百餘人、皆著百濟服、觀者悉悅。以佛舍利籠置刹柱礎中。

（蘇我大臣馬子宿禰合戰願に依って飛鳥の地に法興寺を建つ。立刹柱の日、嶋大臣、並びに百餘人、皆百済服を着る。観る者悉く悦ぶ。仏舎利籠を以て刹柱礎中に置く）

Ⅲ、九州の古代寺院と豊肥の仏教交流

1、六世紀の朝鮮と日本（大和）の交流経路

a　対馬、壱岐、九州北部、関門海峡というルート　　b　肥国、有明海、豊国ルート

六世紀前半、筑紫国造磐井の反乱

⟶火君筑紫の唐泊（福岡県西区）や肥の唐津（佐賀県唐津）に進出して勢力を伸ばしたという。

＊この地域では百済元嘉暦を用いた「大歳庚寅」銘の金象嵌鉄剣が出土。

推古天皇十七年の道欣と恵彌らの漂流によって、対馬経由ではない航路が考えられるようになった。大和王権は筑紫に到来しない場合で渡来してくる朝鮮半島の人々を把握していたと思われる。

2、有明・不知火海の経路

A、有明海から菊池・阿蘇地域・・・『日本書紀』景行天皇九州巡幸説話。

B、肥国（菊池・阿蘇）から豊国瀬戸内へ・・・鞠智城下「車路」と豊肥の連絡路の繋がり。

C、豊肥の仏教信仰・・・日羅説話の伝承の研究成果

①聖徳太子説話の中に仏教興隆と太子の師として登場。

②古代寺院の開基者。

③磨崖石仏の製作者。

＊日羅伝説が残る地域が鹿児島、熊本、大分、近畿に集中。

3、肥後の古代寺院

・肥後最古の寺院址は白鳳時代（七世紀末～）と推定される陳内廃寺

・飛鳥時代の寺院の遺構は現在において皆無である。

九州の古代寺院の成立の問題点⟶**仏教文化が最初に伝わったと考えられる九州地方に飛鳥時代前半の仏教遺物や遺構が見られないことである。**

九州最古の寺院が出現　⟶塔の原廃寺、上岩田遺跡（井上廃寺）など（七世紀後半）。

問題点・・・寺谷廃寺（埼玉県、七世紀前半）や北野廃寺（四天王寺式伽藍配置、愛知県、七世紀後半）などの寺院が建立。水瓶、佐波理碗などの仏具様式の金属器が六世紀末の関東の古墳で出現している。

【史料12】『日本書紀』天武十四年（685）二月条

詔、諸國毎家作佛舍、乃置佛像及經、以禮拜供養。

（詔して諸国、家毎に仏舎を作りて、乃ち仏像及び経を置きて礼拝供養せしむ）

肥後の古代寺院の成立は、出雲の古代寺院成立とも類似

出雲地域では陳内廃寺とほぼ同時期と考えられる「教昊寺」が建立され、それに倣って土着の氏族が「新造院」を建立している。天武・持統朝の仏教政策の一つとして、地方の寺院建立が急速に進んでいる。

肥後の古代信仰

阿蘇君の火山信仰や火君の不知火信仰。他田日奉部や日置部などの祭祀職掌の部民による日神信仰。

・・・⟶つまり、出雲と同じく古来より固有の神祇信仰が見られる

＊伊勢、出雲など神郡がある国造の宗教的権威が強い地域は、寺院造営が促進されていない。

古代における神祇信仰の形態は三輪山祭祀の事例にみられるように在地不介入であり、委託祭祀であった。国家が氏族をまとめる上で、氏族の統一を図りにくい。一方、仏教は、どの氏族でも同一の信仰形態で教化活動できるため、大和王権が中央集権国家に展開する過程の一つの現象として、護国の功徳を得るために仏教を広めると同時に、国家と氏族の祭祀権の統一を図ったとも考えられよう。

◎まとめ・・・今後の研究課題

① 九州から畿内へ仏教が伝来した経路は豊国地域が起点であった。そこで勃興した八幡信仰は周知のように奈良時代に朝廷の政治で重要な事項となる。七、八世紀の九州における政治と宗教を検討する場合、八幡信仰の状況を考慮する必要があろう。

② 肥後における朝鮮半島系の遺物、『日本書紀』に記す葦北国造の子・日羅や百済僧の記録や伝承、及び仏教信仰の検討から百済と密接な交流がうかがわれ、筑紫大宰の機能が確立するまで、六世紀における百済と大和王権の交流は、主に筑紫を経由せず、肥国を経由していた。

③ 肥後に仏教を伝えた人々は渡来人や朝鮮半島と深く関係する在地氏族と考えられる。律令制に至るまでの古代肥後における信仰をみると、独自の神祇信仰が見られる。当時の信仰形態は在地不介入な側面があるため、渡来系の氏族の信仰に先住氏族が介入する様相が考えられない。そのため、渡来系氏族の個人的信仰として仏教が受容され、徐々に先住民に浸透したと考えられる。

《参考文献》

笹山晴生監修（2010）『古代山城　鞠智城を考える　—2009 年東京シンポジウムの記録』山川出版社。

熊本県教育委員会編（2013）『鞠智城シンポジウム　二〇一二成果報告書　ここまでわかった鞠智城』

古代山城出土唐居敷から見た鞠智城跡の位置づけ

九州歴史資料館　技術主査　小澤佳憲

1．鞠智城跡の築城期はいつか

1―1　文献史学からの検討

・日本書紀における古代山城の築城記録　（※白村江の敗戦＝ 663 年）

水城跡＝ 664 年

大野城跡・基肄城跡・長門城跡＝ 665 年（亡命百済人貴族に作らせる）

金田城跡・屋島城跡・高安城跡＝ 667 年

＝朝鮮式山城

※史書（日本書紀以外の歴史書を含む）におけるそのほかの古代山城の記録（参考）

築城記事：長門に 1 、筑紫に 2 城（城名見えず）＝ 670 年（未比定、667 年築城の重複？）

怡土城＝ 756 年、怡土城築城関連の初出

修築記事：大野城跡・基肄城跡・鞠智城跡＝ 698 年

高安城跡＝ 669 年・670 年・697 年

三野城・稲積城（西海道（＝九州）内と推測されるが所在地不明）＝ 699 年

廃城記事：高安城＝ 701 年

茨城・常城（安芸内とされるが所在地不明）＝ 719 年

その他の記事：三尾城・高安城（いずれも壬申の乱で近江方の拠点として）＝ 672 年

大野城跡に四王院（寺院）建立＝ 774 年、以後四王院関連も交え 876 年まで

鞠智城跡に変異＝ 858 年・879 年など

⇕

鞠智城には築城記録がない。白村江の敗戦という同じ動機で築城したなら、同じような記録があってもよいが…

1―2　考古学からの検討

・出土土器からの検討

鞠智城築城の直前まで、当地には古墳時代後期集落が展開していた → 古い土器の混入

土器の量が急増＝ 7 世紀第 4 四半期（675 ～ 700 年）。ただし、細かい編年は困難

出土瓦の検討（甲本 2006）。大野城跡出土瓦より少し遅れる

→ 大野城跡の瓦建物の初現は実は不明。

・分布論から検討

白村江の敗戦以後に築城記事の見える諸城について、

第一次防衛ライン：水城・大野城・基肄城＝防衛拠点である大宰府政庁の防護を固める＝至急

第二次防衛ライン：金田城・長門城・屋島城・高安城

＝緊張緩和を受けて、国を守る「かたち」を

→鞠智城もこの流れの中で築かれたとする（小田 2012）

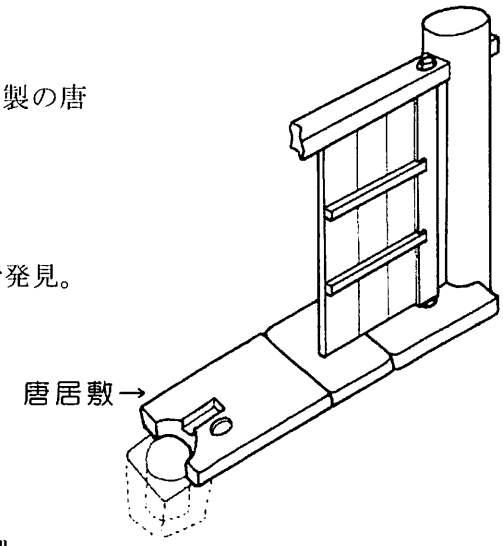
2. 鞠智城跡の築城期を探る(築城技術からの検討)（小澤 2012）

・朝鮮式山城における築城技術の共通性

土塁の構築技法 → 土塁中の石材の使い方に特徴(土塁の基底部に未加工石材を配置)
石垣の構築技法の検討 → 「単位布積み・凭せかけ積み」
＝他の古代山城(いわゆる神籠石式山城)とは異なる技術体系。
亡命百済人技術者の指導による共通工法の可能性(半島における事例は今後要検討)

3. 鞠智城跡出土石製唐居敷の検討

・鞠智城には 3 箇所に城門があり、すべての門で石製の唐居敷が発見されている。
・深迫門跡：1 基
・堀切門跡：2 基
(1 基は門跡全面で発見、もう 1 基は近所の神社で発見。
後に両者が接合することが判明。)
・池ノ尾門跡：1 基　　の、計 4 基(3 石)



3－1　深迫門跡の石製唐居敷

・1.5 × 3 mほどの巨石に、軸摺穴が一つあいている。
・軸摺穴の観察：口径 15 cm、底径 11 cm、深さ 13.5 cm。
縁が二段掘り…後世の剥離の可能性もあり。他に例はない
側面には叩打による調整痕跡が明瞭に残る。
⇔底部の中央は円形に平滑面が形成 … 軸があたって摩耗した痕跡か
・石材上面の観察：穴の周囲から左側の平坦面全面に摩耗痕跡 → 門道敷石として機能
穴の右側は摩耗痕跡なし、平坦に調整される → 門主柱の基礎部か

3—2　堀切門跡の石製唐居敷

・門跡遺存例は、2 × 3m ほどの巨石に軸摺穴・主柱刳込が見られる。
・軸摺穴の観察：口径 16 cm、底径 12 cm、深さ 14 cm。深迫門例と類似。
側面の調整も深迫門例と類似。底部の遠泳摩耗痕跡は非常に薄い。
・石材上面の観察：ごくわずかだが摩耗痕跡あり。門通路として利用されたことは形状より明らか。
・木野神社発見例は、1 × 1.5m ほどの石材に軸摺穴…主柱刳込がみられる。
・軸摺穴の観察：口径 15.5 cm、底径 12 cm、深さ 13 cm
側面には叩打による調整痕跡(凹凸)がわずかに残る
底面－側壁境界部には隅を直角にする加工痕跡あり→再加工痕か
・主柱刳込部の観察：大きな叩打加工痕跡残る。

3－3　池ノ尾門跡の石製唐居敷

・軸摺穴の観察：口径 16 cm、低径 11 cm、深さ 13 cm。深迫門例と類似。
側面には叩打による調整痕跡が見える。
底面の中央部に直径 8 cmほど、深さ 5mm ほどの円形のくぼみあり
→扉の回転軸による摩耗痕跡

4. 朝鮮式山城出土唐居敷の検討

4—1　大野城跡の唐居敷

・円形の軸摺穴と半円形の主柱刳込、方立穴を持つタイプ
　水城口城門・坂本口城門・太宰府口城門（Ⅰ期）。いずれも城の南側の城門で用いられる。
　→「大野城Ⅰ型」
・方形の軸摺穴と半円形の主柱刳り込み・方立穴を持つタイプ
　小石垣城門・北石垣城門・宇美口城門（推定Ⅱ期）・クロガネ岩城門。すべて北側の城門。
　→「大野城Ⅱ型」
・そのほか、主柱用加工が礎石建物用に変更された派生形式がある。
・太宰府口城門において、大野城Ⅰ型が先行し、大野城Ⅱ型が後出すること、
　北石垣城門の構築年代がおそらく初築時よりも下ること→Ⅰ型が先行しⅡ型が後出する

4—2　基肄城跡の唐居敷

・円形の軸摺穴と半円形の主柱刳り込みを持つタイプ
　東北門で用いられる。鞠智城跡堀切門の礎石と同じ類型で、「基肄城型」

4—3　金田城跡の唐居敷

・円形の軸摺穴と、これと同じ大きさの主柱掘込をもつ。
　二ノ城戸門・三の城戸門・南門は共通性が高い。ビングシ門は主柱用の穴がやや大きい。
　「金田城型」

5. 神籠石式山城出土唐居敷の検討

5—1　鬼ノ城跡

・東門＝方形の軸摺穴と半円形の主柱刳込、方立て穴を持つ、大野城Ⅱ類と同じタイプ
・南・北・西門＝方形の軸摺穴、方形の主柱刳り込み、方立て穴を持つ
　→大野城Ⅱ類が方柱用に改変されたもの＝「鬼ノ城型」

5—2　そのほかの瀬戸内地域の神籠石式山城

・石城山神籠石：沓石
・讃岐城山城跡：ホロソ石
・播磨城山城跡：門の築石

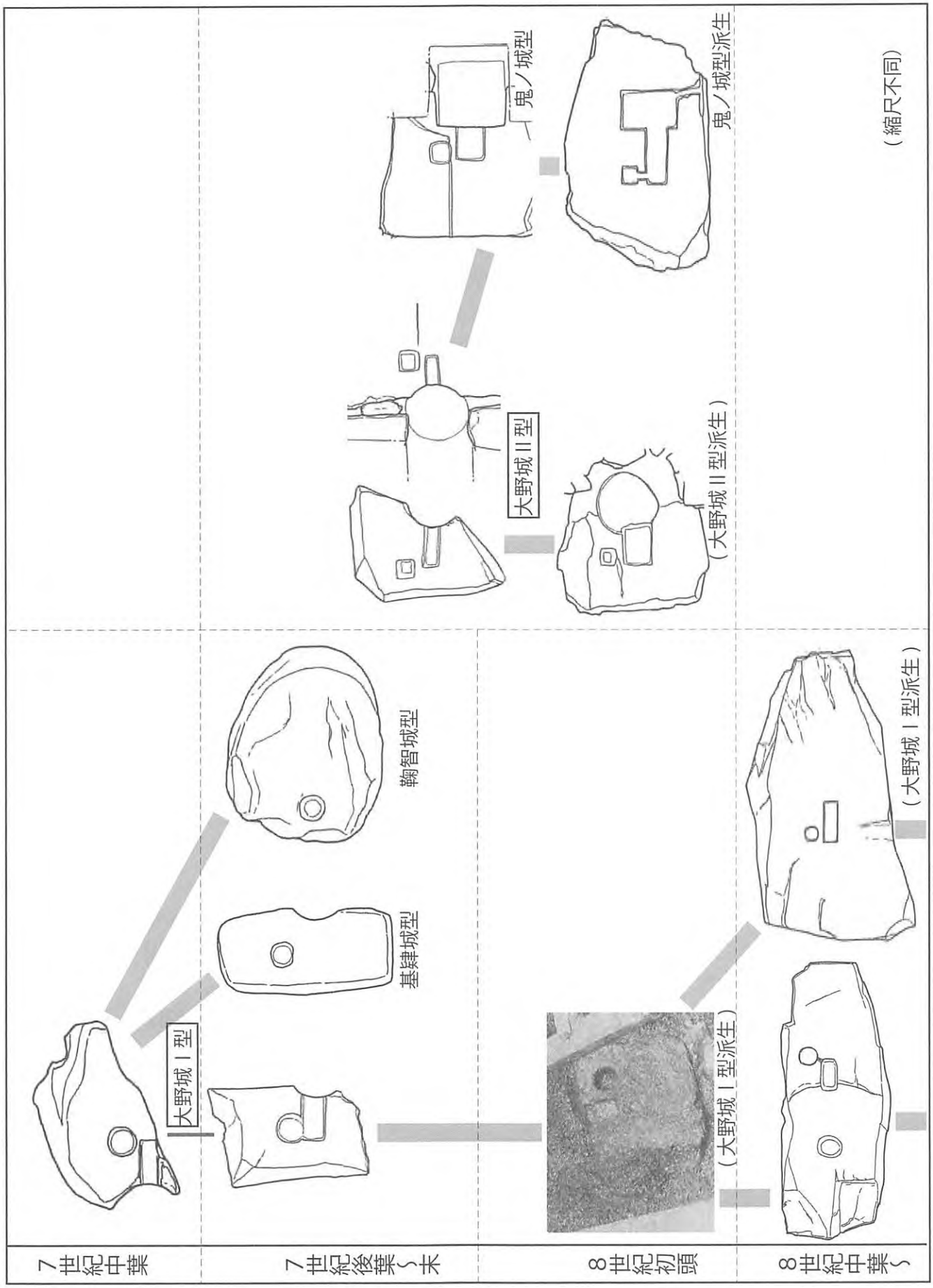
いずれも、鬼ノ城型の唐居敷から軸摺穴を省略したもの
→唐居敷としては取り扱えないが注意される資料

6. 石製唐居敷の編年

・類型の設定

大野城Ⅰ型：6 世紀中葉～後葉。円形の軸摺穴と円柱用の主柱刳込・方立穴を持つ。
　軸摺穴以外を省略することで派生形式が成立。
　→基肄城型（方立て穴を省略）、鞠智城型（方立て穴・主柱用加工を省略）。
　主柱用加工を礎石建物用に変化させながら 8 世紀代以降まで継続していく。

大野城Ⅱ型：おそらく 6 世紀後葉～末。方形の軸摺穴と円柱用の主柱刳込・方立穴を持つ。
　主柱用加工を建物に合わせて変化させることで派生形式が成立。
　→鬼ノ城型（方柱用の刳込に変化）、太宰府口城門Ⅱ期例（礎石建物用に変化）
　短期間で消滅する。



石製唐居敷の分類と編年

平成25年度鞠智城跡「特別研究」成果報告会　　於 くまもと県民交流館パレア　パレアホール

08/03/2014

朝鮮式山城の外交・防衛上の機能の比較研究からみた鞠智城

東京大学大学院人文社会系研究科博士課程

柿沼 亮介

はじめに　～鞠智城の特異性～

○古代山城・・・対馬・大宰府周辺・瀬戸内海沿岸に集中

金田城（対馬）　朝鮮半島をのぞむ北西岸、峻嶮

大野城・基肄城　大宰府の防衛　　大野城：福岡平野側　　基肄城：筑紫平野側

瀬戸内海沿岸の山城　　長門城、鬼ノ城、城山城、屋嶋城など

瀬戸内海を挟んで設置　　航行する船を監視　　古代官道に沿う

高安城　　大和と河内の間　　大阪湾をのぞむ　　最後の防衛ライン

○鞠智城の特徴

・外交使節の上京経路（対馬→大宰府→関門海峡→瀬戸内海→難波）上にない

・菊鹿盆地を一望することはできるが、海沿いに丘陵があるため、有明海そのものは監視できない

・標高１００～１７０ｍ弱

⇒鞠智城は、他の山城のように対外防衛を意識したものであるとは考え難い。

１．律令国家における外交使節の来日

○大宰府→瀬戸内海→難波ルートでの上京

【史料１】『日本書紀』白雉二年（６５１）是歳条

新羅貢調使知萬沙飡等、着二唐国服一、泊二于筑紫一。朝庭悪二恣移一レ俗、訶嘖追還。于時、巨勢大臣、奏請之曰、方今不レ伐二新羅一、於後必當有レ悔。其伐之状、不レ須二挙力一。**自二難波津一、至二于筑紫海裏一、相接浮二盈艫舳一**、徴二召新羅一、問二其罪一者、可二易得一焉。

→難波・筑紫・朝鮮半島が一直線にあるという古代の地理感覚

来日した外交使節・・・全員が都まで入れるわけではない

ex. 日本の遣唐使：「四つの船」に乗って入唐した５００～６００人のうち、１割程度しか入京（上京）が許されないこともある。［東野 2007］［石見 2009］

【史料２】『続日本紀』天平勝宝四年閏三月己巳（２２日）条

大宰府奏、新羅王子韓阿飡金泰廉、貢調使大使金暄及送王子使金弼言等**七百餘人、乗二船七艘一来泊**。

【史料３】『続日本紀』天平勝宝四年六月己丑（１４日）条

新羅王子金泰廉等拝朝。并貢レ調。因奏曰、新羅国王言二日本照臨天皇朝庭一。新羅国者、始レ自二遠朝一、世々不レ絶、舟檝並連、来奉二国家一。今欲二国王親来朝貢二進御調一。而顧念、一日无レ主、国政絶乱。是以、遣二王子韓阿飡泰廉一、代レ王為レ首、**率二使下三百七十餘人一入朝**、兼令レ貢二種々御調一。謹以申聞、詔報曰、新羅国、始レ自二遠朝一、世々不レ絶、供二奉国家一。今復遣二王子泰廉一入朝、兼貢二御調一。王之勤誠、朕有レ嘉焉。自レ今長遠、当レ加二撫存一。泰廉又奏言、普天之下、無レ匪二王土一、率土之浜、無レ匪二王臣一。泰廉、幸逢二聖

世一、来朝供奉、不レ勝二歓慶一。私自所レ備国土微物、謹以奉進。詔報、泰廉所レ奏聞之。

→大宰府は７００余人の来日を報告したが、拝朝・貢調を行う際には３７０余人を率いたとなっている。

→大宰府に来着した後、一部の者が上京を許されて瀬戸内海経由で畿内へ

【史料４】『続日本紀』天平勝宝四年七月戊辰（２４日）条

泰廉等還在二**難波館**一。勅遣レ使、賜二絁布并酒肴一。

難波・・・都が海に面していたい古代国家の外港　６世紀以降、多くの外交関係の施設

ex. 難波館、百済客館、高麗館、三韓館　［直木 1991］

→古代の外交使節は、来日した際に大宰府→瀬戸内海→難波というルートを通り、大宰府や難波で外交儀礼を行った他、入京させるかどうかの日本側の判断を待つなどした。

○渤海使の来日と「旧例」「古例」

渤海使の入境経路・・・北陸や出羽など日本海沿岸を発着点とした［古畑 1994］

【史料５】『続日本紀』宝亀四年（７７３）六月戊辰（２４日）条

又渤海使、取二此道一来朝者、承前禁断。自今以後、**宜下依二旧例一、従二筑紫道一来朝上**。

【史料６】『続日本紀』宝亀八年（７７７）正月癸酉（２０日）条

遣レ使、問二渤海使史都蒙等一曰、去宝亀四年、烏須弗帰二本蕃一日、太政官処分、渤海入朝使、自レ今以後、**宜下依二古例一向中大宰府上。不レ得下取二北路一来上**。而今違二此約束一。其事如何。対曰、烏須弗来帰之日、実承二此旨一。由レ是、都蒙等発レ自二弊邑南海府吐号浦一、西指二対馬嶋竹室之津一。而海中遭レ風、着二此禁境一。失レ約之罪、更無レ所レ避。

→大宰府→瀬戸内海→難波ルートを「旧例」「古例」とする意識

→なぜ、大宰府を経由するルートに固執しているのか？

２．古代の入境経路

○東松浦半島の重要性

【史料７】『三国志』魏書・巻30・烏丸鮮卑東夷伝・倭人

倭人在二帯方東南大海之中一、依二山島一為二国邑一。旧百余国、漢時有二朝見者一、今使駅所レ通三十国。従レ郡至レ倭、循二海岸一水行、歴二韓国一、乍南乍東、到二其北岸狗邪韓国一、七千餘里。始度二一海一、千余里。至二対馬国一。（中略＝対馬についての説明）又南渡二一海一、千余里。名曰二瀚海一。至二一大国一。（中略＝一支国についての説明）又渡二一海一、千余里。至二末盧国一。（中略＝末盧国についての説明）東南陸行、五百里。到二伊都国一。（中略）世有レ王。皆統二属女王国一。郡使往来常所レ駐。東南至二奴國一、百里。（後略）

→朝鮮半島の狗邪韓国から北部九州へのルートは、対馬・壱岐を経て東松浦半島の末盧国に至り、そこから東に向かうというもの

【史料８】『肥前国風土記』

逢鹿駅。〈在二郡西北一。〉

曩者、気長足姫尊、欲レ征二伐新羅一、行幸時、於二此道路一、有レ鹿遇之。因名二遇鹿駅一。々東海、有二蚫・螺・鯛・海藻・海松等一。

登望駅。〈在二郡西北一。〉

昔者、気長足姫尊、到二於此処一、留為二雄装一、御負之鞆、落二於此村一。因号二鞆駅一。々東西之海、有二蚫・螺・鯛・雑魚・海藻・海松等一。

→・逢鹿駅は東松浦半島東海岸の唐津市相賀、登望駅は西海岸にあたる唐津市呼子町の小友と考えられる。壱岐への渡海には、南東季節風が卓越する夏季には登望駅を、北西季節風が吹く冬季には逢鹿駅を利用した。[木下 2009]

・どちらの駅とも、三韓征伐伝説のある神功皇后が来た際の逸話にちなんで名付けられている。

【史料９】『入唐求法巡礼行記』承和五年（８３８）６月条

十七日夜半、得二嵐風一、上レ帆揺レ櫓行。巳時、到二志賀島東　海一。為レ無二信風一、五箇日停宿矣。

廿二日卯時、得二艮風一、進発、更不レ覓レ澳、投二夜暗一行。

廿三日巳時、到二有救島一。東北風吹、征留執レ別。比レ至二酉　時一、上レ帆渡レ海、東北風吹。入レ夜暗行、両舶火信相通。

→博多湾を出て西に向かった遣唐使船が途中どの港にも立ち寄らなかったことについて、わざわざ「不レ覓レ澳」と記す。　※「澳」・・・船の停泊できる海岸。

→九州北西部沿岸を航行する船は通常、所々の港に立ち寄りながら進むものであるということを表す。

⇒外交使節の来日に際しては、対馬・壱岐を経た後、まず東松浦半島に渡り、その後東に進んで大宰府（博多）を目指した。

→大宰府（博多）は、日本本土における最初の寄港地ではないにもかかわらず、なぜ古代の外交の窓口となったのか？

３．多元的な外交交渉と王権

○胸肩氏と王権

・４世紀後半：沖ノ島において国家的な祭祀が開始

・５世紀：宗像神は朝鮮半島との対外交渉において神威を発揮する存在

【史料１０】『日本書紀』雄略天皇九年三月条

天皇欲二親伐二新羅一。神戒二天皇一曰、無レ往也。天皇由レ是不二果行一。

・７世紀：胸肩氏の娘が天武天皇に嫁ぎ、さらに生まれた高市皇子は太政大臣に

【史料１１】『日本書紀』天武天皇二年（６７３）二月癸未（２７日）条

天皇初娶二鏡王女額田姫王一、生二十市皇女一。次納二胸形君徳善女尼子娘一、生二高市皇子命一。

・記紀神話：宗像三女神をアマテラスの子として描く

○有明海沿岸の勢力

・５世紀：玄海灘沿岸の勢力にかわり、有明海沿岸の勢力が対外交流の主導権を握る［白石 2011］

・６世紀初め：江田船山古墳から、金銅製装身具や土器などの百済系遺物が出土［西谷 2010］

・６世紀後半：・火葦北国造の阿利斯登が大伴金村によって、加耶での倭の利権の確保を目指して朝鮮半島に派遣。(『日本書紀』敏達天皇十二年（５８３）是歳条)

・阿利斯登の子の日羅は、百済の十六等の官位の第二位「達率」の身分を持つ。敏達天皇は対外政策の諮問のため、百済から招聘。(同七月朔条)

・７世紀：【史料１２】『日本書紀』推古天皇十七年（６０９）四月庚子（４日）条

筑紫大宰奏上言、**百済僧道欣・恵彌為レ首、一十人、俗七十五人、泊二于肥後国**

葦北津一。是時、遣二難波吉士徳摩呂・船史龍一、以問之曰、何来也。対曰、百済王命以遣二於呉国一。其国有レ乱不レ得レ入。更返二於本郷一。忽逢二暴風一、漂二蕩海中一。然有二大幸一、而泊二于聖帝之辺境一。以歓喜。

・８世紀：正倉院文書の大宝二年（７０２）「筑前国嶋郡川辺里戸籍」
　　：肥君猪手という人物が筑前国嶋（志麻）郡の大領

⇒日本列島と朝鮮半島との間での外交交渉は、ヤマト政権が独占的に行い得たわけではなく、各地の勢力が独自の交流ルートを維持するなど、多元的なもの。

4．大宰府と鞠智城の位置と機能

大宰府
・沿岸から１５キロも内陸
・外交使節の日本本土での最初の来着地ではない
・福岡平野と筑紫平野を結ぶ回廊部
　→前代から独自の外交ルートを有していた玄海灘沿岸の勢力や有明海沿岸の勢力を抑え、王権が外交権を掌握するため、この地に置かれた。　cf. 斉明天皇の朝倉宮
　　→だからこそ、古代国家は大宰府を経由するルートにこだわった。

鞠智城
・有明海を直接監視することはできない
・急峻ではない
　→大宰府と同様、それまで独自の外交ルートを有していた肥後の勢力に対する抑えのために設置。

5．鞠智城の存続理由

・７１９年、備後の茨城・常城が停廃（『続日本紀』養老三年（７１９）十二月戊戌（１５日）条）
・鬼ノ城の出土遺物：８世紀初頭までのものがほとんど
　　→瀬戸内海沿岸の山城は、８世紀以降次々と機能を停止

一方　鞠智城は１０世紀まで存続
　→新羅海賊の活動が活発化する９世紀後半に、鞠智城出土の土器の数量が増加
　　→在地勢力による独自の外交を牽制する意味

＜参考文献＞

・石井正敏「日本・渤海交渉と渤海高句麗継承国意識」（『日本渤海関係史の研究』吉川弘文館、２００１、初出１９７５）
・石見清裕『唐代の国際関係』（世界史リブレット９７、山川出版社、２００９）
・木下良『事典　日本古代の道と駅』（吉川弘文館、２００９）
・笹山晴生監修『古代山城　鞠智城を考える　――２００９年東京シンポジウムの記録』（山川出版社、２０１０）
・白石太一郎「ヤマト王権と沖ノ島祭祀」
　（「宗像・沖ノ島と関連遺跡群」世界遺産推進会議『「宗像・沖ノ島と関連遺跡群」研究報告Ⅰ』、２０１１）
・東野治之『遣唐使』（岩波新書、２００７）
・直木孝次郎「難波津と難波の堀江　―大化以前を中心に―」（『難波宮と難波津の研究』吉川弘文館、１９９４）
・西谷正「朝鮮半島から見た鞠智城」（「鞠智城東京シンポジウム　古代山城鞠智城を考えるⅡ　東アジアの中の古代鞠智城資料、熊本県教育委員会、２０１０）
・古畑徹「渤海・日本間航路の諸問題」（『古代文化』４６－８、１９９４）

鞠智城跡「特別研究」研究成果報告会（於くまもと県民交流館パレア）　2014/03/08（土）

律令国家成立期における鞠智城 —「繕治」と列島南部の関係を中心に—

広島大学文学研究科　菊池 達也

はじめに

※今後は古代日本の歴史的展開の中で、鞠智城がどの時期にどのような役割を一義的に担っていたかを明らかにする必要性

◇問題点の所在

・「繕治」【史料①】の目的について列島南部を支配・統治するために行われたとする説がある[1]
　⇔共通認識となっているわけではない

・考古学的知見との矛盾[2]

☞列島北部に対する政策も検討対象に加える

◎鞠智城の「繕治」の目的および8世紀に見られる変化の要因を検討していき、その上で律令国家成立期の鞠智城の役割について考察していく

【史料①】『続日本紀』文武天皇二年（六九八）五月甲申（二五日）条
令二大宰府繕治大野・基肄・鞠智三城一。

1　7世紀～8世紀初頭における列島南北に対する政策

(1) 斉明期以前【第1・2表】

・列島南部に対する政策・・・帰順の受け入れ、使節の派遣

・列島北部に対する政策との比較・・・軍事的進出、饗宴、帰順の受け入れ、行政区画の設定・行政機関の設置

☞列島南北に居住する人々を帰順すべき存在と見なし、受け入れていたことは共通しているが、進出度合を比べると列島北部に対する積極性が際立つ
　⇒この時期の列島南北に対する政策は、統一性があったとは言いがたい

(2) 天武～持統期【第3・4表】【史料②】

※天智期・・・東アジアの国際情勢の影響もあり、列島南北に対する政策が見られなくなる

・列島南部に対する政策・・・饗宴・賞賜、使節の派遣、仏教政策

☞列島北部に対する政策と比較すると、列島南北に対し、同時期に同一基調にある政策が行われるようになったことがわかる
　⇒ただしこの時期は、武力行使も辞さない強硬的な手段がとられることがなかった

【史料②】
ア『日本書紀』天武天皇一一年（六八二）七月戊午（二七日）条
饗二隼人等一於明日香寺西一、発二種々楽一。仍賜二禄各有一差。道俗悉見之。
イ『日本書紀』持統天皇二年（六八八）一二月丙申（二二日）条
饗二蝦夷男女二百一十三人一於飛鳥寺西槻下一。仍授二冠位一賜二物各有一差。

(3) 文武～神亀期【第5・6表】【史料③】

・列島南北に対する政策の共通性・・・来朝・饗宴、行政区画の設定・行政機関の設置、武力行使・軍事施設の整備

☞引き続きこの時期にも列島南北に対する政策に共通性が見られる
　⇒一方で文武期を画期として強硬的な政策が行われるようになった

◎小括

①少なくとも史料上からは、列島南北に対する政策が当初から共通していたわけではなく、天武期ごろから本格的に共通性が見られるようになったことが読み取れる

②強硬的な政策は、文武期を転換点として列島南北に対して行われるようになったことがわかる

【史料③】
ア『続日本紀』和銅三年（七一〇）正月壬子（一日）条
天皇御二大極殿一受二朝一。隼人・蝦夷等、亦在二列一。左将軍正五位上大伴宿禰旅人（中略）等、於二皇城門外朱雀路東西一分頭、陳二列騎兵一、引二隼人・蝦夷等一而進。
イ『続日本紀』和銅三年（七一〇）正月丁卯（一六日）条
天皇御二重閣門一、賜二宴文武百官并隼人・蝦夷一、奏二諸方楽一。従五位已上賜二衣一襲一。隼人・蝦夷等、亦授二位一賜二禄各有一差。

---

[1] 板楠和子「「肥後国」と「鞠智城」」（熊本県教育委員会『鞠智城Ⅱ—鞠智城跡第8～32次調査報告—』〈2012年〉）、鶴嶋俊彦「古代官道車路と鞠智城」（鈴木靖民・荒井秀規編『古代東アジアの道路と交通』〈勉誠出版、2011年〉）、濱田耕策「朝鮮古代史からみた鞠智城」（熊本県教育委員会『古代山城　鞠智城を考える—2009年東京シンポジウムの記録』〈山川出版社、2010年〉所収）、甲元眞之「鞠智城についての一考察」（『肥後考古』第14号、2006年）、西住欣一郎「発掘から見た鞠智城跡—最近の調査成果から」（龍田考古会『先史学・考古学論究』Ⅲ〈1999年〉）。

[2] 熊本県教育委員会『鞠智城Ⅱ—鞠智城跡第8～32次調査報告—』（2012年）。

2　鞠智城の「繕治」の目的

◇鞠智城の「繕治」【史料①】・・・①文武期、②大宰府防衛の役割を果たした大野・基肄城とともに「繕治」

・①について・・・文武期は、列島南北に対する支配強化のために武力行使も辞さない強硬的な手段をとることが志向され、その準備が進められた時期

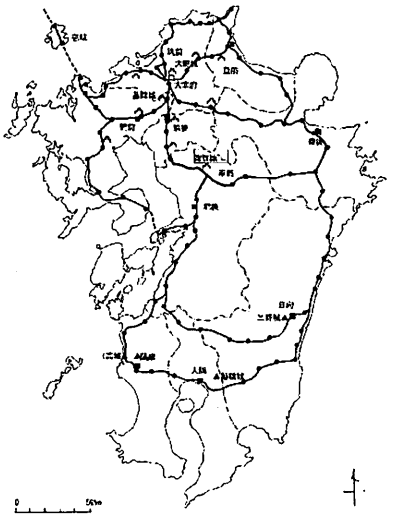
・②について・・・大野・基肄城が防衛していた大宰府こそが列島南部に対する強硬的な政策の中心

※文武期以降の大宰府・・・列島南部との交戦を主導、武器の収集

⇒大野・基肄城の「繕治」は列島南部に対する強硬的な政策に備えて行われたと考えるべきであり、それと同じ日に「繕治」が行われた鞠智城もまた同じ目的で行われたと考えられる

◎鞠智城の「繕治」は文武期に志向された列島南部に対する強硬的な政策の準備として行われたと考えられる

※具体的には九州北部の兵士を統括する機能を果たす【第１図】



第１図　西海道の駅路と古代山城・城柵

3　列島南部に対する政策と鞠智城の変化

※鞠智城の変化と九州南部支配の通説的理解[3]の間の矛盾【第２図】

→土器の出土量・種類、建物の構成の変化がなぜ起こったのか？

◇列島南部に対する政策の変化

・九州南部では養老期の交戦、南島では大宝期の交戦以降、少なくとも史料上で交戦を確認することができない

・九州南部における班田実施の中止【史料④】

→班田を行う意志の放棄、強硬的な態度で接しようとする意志を読み取ることができない

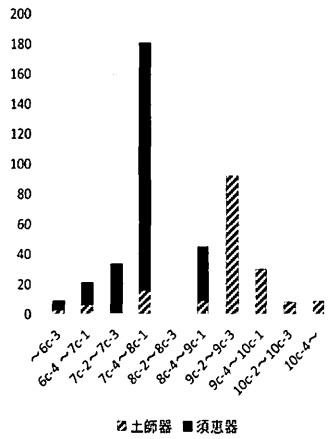
☞天平期にいたって律令国家は九州南部に対する政策方針を変更

◇鞠智城との関わり

☞列島南部に対する政策の方針転換と鞠智城に変化が起こった時期が符号

→そのため鞠智城には様々な変化が見られるようになったのではないか？

◎列島南部に対する方針の変化を見ていくと、鞠智城での様々な変化を矛盾なく説明することができる



第２図 鞠智城跡出土土器の時期別比較図

【史料④】『続日本紀』天平二年（七三〇）三月辛卯（七日）条

大宰府言、大隅・薩摩両国百姓、建レ国以来、未二曾班レ田。其所レ有田悉是墾田。相承爲レ佃、不レ願二改動一。若従二班授一、恐多二喧訴一。於レ是隨レ旧不レ動、各令二自佃一焉。

おわりに

◇律令国家成立期の鞠智城の役割

7 世紀最末期；支配の行き届いていない列島南北に対し、武力行使も辞さない強硬的な態度で支配強化を目指す

→列島南部に対する支配強化のために白羽の矢が立ったのが鞠智城

⇒「繕治」が行われた後、九州北部の兵士を統括するという新たな機能を果たすことに

↓

8 世紀初頭；強硬的な政策がある程度功を奏し、国郡の設定、行政機関の設置、人身把握や徴税の実施が行われるようになった⇔動乱を完全に鎮圧させることはできなかった

↓

8 世紀半ば（天平期以降）；列島南部に対する強硬的な政策方針の放棄

→西海道にある軍事拠点に変化をもたらす

鞠智城はその後様々な変化が生じ、「繕治」以降担ってきた歴史的役割が変化していく

◎律令国家成立期の鞠智城は、列島南部に対する支配強化政策と極めて密接に関わっていることがわかる

⇒この時期の鞠智城は列島南北に対する支配強化という国家的プロジェクトの中で考える必要がある

[3] 永山修一『隼人と古代日本』（同成社、2009 年）。

第１表　斉明期以前の南島に関する主な事象

年	月	内容
推古天皇24年(616)	3～7月	掖玖人、計20人が来朝・帰化する。
推古天皇28年(620)	8月	掖玖人2人が伊豆島に流れ来る。
舒明天皇元年(629)	4月	田部連を掖玖に遣わす（翌年9月帰還）。
舒明天皇3年（631）	2月	掖玖人が帰化する。

※出典は『日本書紀』

第２表　斉明期以前の列島北部に関する主な事象

年	月	内容
舒明天皇9年（637）		蝦夷が叛いたため上毛野形名を将軍として交戦する。
皇極天皇元年(642)	9月	越の蝦夷数千が「内附」する。
	10月	蝦夷を饗応する。
		蘇我蝦夷が蝦夷を自邸に招いて饗応する。
大化2年　（646）	1月	蝦夷、「親附」する。
大化3年　（647）		越国に渟足柵を造営し、柵戸を置く。
大化4年　（648）		磐舟柵を造営して蝦夷に備え、越と信濃の人々を柵戸とする。
斉明天皇元年(655)	7月	難波宮で越・陸奥の蝦夷を饗応し、柵養蝦夷と津軽蝦夷に冠位を授ける。
		蝦夷、隼人とともに「内属」し、朝廷に詣で献上する。
斉明天皇4年（658）	4月	阿倍比羅夫が軍船を率いて蝦夷と交戦し、「齶田・渟代二郡」の蝦夷を服属させ、齶田蝦夷恩荷を「渟代・津軽二郡郡領」とする。有間浜で渡嶋蝦夷を饗応する。
	7月	朝貢した蝦夷を饗応し、柵養蝦夷らに位を授け、武器・武具を与える。また、「渟足郡大領」の沙奈具那に蝦夷戸口と虜戸口を検覈させる。
		越国守阿倍引田比羅夫が粛慎と交戦し、羆2頭と、羆の毛皮70枚を献上する。
斉明天皇5年（659）	3月	飛鳥の甘樫丘の東の川原に須弥山を作り、陸奥と越の蝦夷を饗応する。
		阿倍比羅夫が蝦夷と交戦し、飽田・渟代・津軽・胆振鉏の蝦夷・虜を饗応し禄を賜う。また、後方羊蹄に政所を設置し、「郡領」を置いて帰還する。道奥・越の国司と評の官人に位を授ける。
	7月	遣唐使が陸奥の蝦夷の男女2人を同道し、出発する。
斉明天皇6年（660）	3月	阿倍比羅夫が渡嶋蝦夷の救援要請を受けて粛慎と交戦し、服属させる。
	5月	阿倍比羅夫が蝦夷を献上する。また、石上池のほとりに須弥山を作って粛慎を饗応する。

※出典は『日本書紀』

第３表　天武～持統期の列島南部に関する主な事象

年	月	内容
天武天皇6年（677）	2月	多禰島人らを飛鳥寺の西の槻のもとで饗応する。
天武天皇8年（679）	11月	大乙下倭馬飼部造連を大使、小乙下上村主光欠を小使として多禰嶋に派遣する。
天武天皇10年(681)	8月	遣多禰嶋使人ら、多禰国図を持ち帰り、その様子を伝える。
	9月	多禰島人らを飛鳥寺の西の河辺で饗応し、種々楽を演奏する。
天武天皇11年(682)	7月	隼人が方物を貢上する、大隅隼人と阿多隼人が相撲をとる。
		多禰人・掖玖人・阿麻彌人に対して禄を賜う。
		隼人らを飛鳥寺の西で饗応し、種々楽の演奏、賜禄が行われる。
天武天皇12年(683)	3月	遣多禰使人らが帰還する。
持統天皇元年(687)	5月	天武天皇の殯宮で隼人が誄する（7月に賞賜される）。
持統天皇3年（689）	1月	筑紫大宰粟田真人朝臣ら、隼人174人、布50常、牛皮6枚、鹿皮50枚を献上する。
持統天皇6年（692）	閏5月	筑紫大宰率河内王らに詔して、沙門（僧侶）を大隅・阿多に派遣し、仏教を伝えさせる。
持統天皇9年（695）	3月	務廣弐文忌寸博勢・進廣参下譯語諸田らを多禰に、蛮の居所を求めるために派遣する。
	5月	隼人大隅を饗応する、隼人相撲を観る。

※出典は『日本書紀』

第４表　天武～持統期の列島北部に関する主な事象

年	月	内容
天武天皇5年（676）	11月	粛慎が新羅使金清平らに従って来朝する。
天武天皇11年(682)	3月	陸奥国の蝦夷に爵位を授ける。
	4月	越の蝦夷伊高岐那らの申請により、俘人70戸で1郡を置く。
持統天皇2年（688）	11月	天武天皇の殯宮で蝦夷が調を背負って誄する。
	12月	蝦夷の男女を飛鳥寺西の槻木のもとで饗応し、冠位を授け、物を与える。
持統天皇3年（689）	1月	陸奥国優嗜曇評の城養蝦夷が出家することを許す。
		越の蝦夷の僧道信に仏像・幡・鉢などを与える。
	7月	陸奥の蝦夷の僧自得に仏像・鐘・香炉・幡などを与える。
		越の蝦夷の八釣魚らに物を与える。
持統天皇8年（694）	1月	粛慎2人に位を授ける。
持統天皇10年(696)	3月	越・渡嶋蝦夷と粛慎に物を与える。

※出典は『日本書紀』

第５表　文武～神亀期の列島南部に関する主な事象

年	月	内容
文武天皇2年（698）	4月	務広武文忌寸博士ら8人を南島に遣わして覓国させる。
文武天皇3年（699）	7月	多禰・夜久・奄美・度感らの人、朝宰に従い来て方物を貢上する（翌月伊勢大神宮と諸社に奉る）、授位・賜物あり。
	11月	文忌寸博士・刑部真木ら南島から帰還、位階を進める。
	12月	大宰府に三野・稲積の2城を修繕させる。
文武天皇4年（700）	6月	薩末比売ら覓国使刑部真木らを脅迫したため、竺志惣領に決罰させる。
大宝2年　（702）	2月	歌奨国が梓弓500張を、翌月信濃国が梓弓1020張を献上し、大宰府に備える。
	6～7月	この頃薩摩国成立か？（永山2009説）
	8月	薩摩・多禰が王化に服さず命令に背いたため「征討」し、戸を数え官吏を置く（翌月叙勲あり）。
	10月	「唱更」（辺境の）国司、柵を建て戍を置くことを申請し認められる。
慶雲元年　（704）	4月	信濃国が弓1400張を献上し、大宰府に備える。
慶雲4年　（707）	7月	大宰府に使を遣わし、南島人に対して位・物を賜う。
和銅2年　（709）	10月	薩摩隼人・郡司以下188人が入朝し、翌年の正月儀礼に蝦夷とともに参加する。
和銅3年　（710）	1月	日向国が采女を、薩摩国が舎人を貢上する。
		日向隼人曽君細麻呂は荒俗を教え諭し、聖化に馴れ服させたため、外従五位下を授ける。
和銅6年　（713）	4月	日向国の肝属・囎唹・大隅・姶羅4郡を割いて始めて大隅国を置く。
	7月	邪賊を討った将軍・士卒など戦陣の有功者1280余人に対し、授勲を行う。
和銅7年　（714）	3月	隼人が住む地に対して、豊前国の民200戸を移配し、勧導させる。
	4月	多禰島に対し印1顆を給う。
	12月	南島の奄美・信覚・球美などから52人が来朝し、翌年の正月儀礼に蝦夷とともに参加する。
霊亀2年　（716）	5月	弓5374張を大宰府に備える。
養老3年　（719）	1月	大型船2艘・短艇10艘を大宰府に充てる。
養老4年　（720）	2月	大宰府、隼人によって大隅国守陽侯史麻呂が殺害されたことを奏上し、翌月から武力衝突が起こる（同5年7月、征隼人副将軍が帰還、斬首・獲虜合わせて1400余人。同6年4月叙勲が行われる）。
	11月	南島人232人に対して、懐柔させるために授位を行う。
養老5年　（721）	12月	薩摩国の人が少ないため、併合が行われる。
神亀4年　（727）	11月	南島人132人が来朝し、叙位を行う。

※特に断らない限り出典は『続日本紀』

第６表　文武～神亀期の列島北部に関する主な事象

年	月	内容
文武天皇元年(697)	10月	陸奥の蝦夷が方物を進上する。
	12月	越後の蝦狄に物を与える。
文武天皇2年（698）	6月	越後国の蝦狄が方物を進上する。
	10月	陸奥の蝦夷が方物を進上する。
	12月	越後国に磐舟柵を修理させる。
文武天皇3年（699）	4月	越後の蝦狄106人に爵を授ける。
文武天皇4年（700）	2月	越後・佐渡国に磐舟柵を修理させる。
大宝2年　（702）	3月	越中国から4郡を分けて、越後国に属させる。
慶雲2年　（705）		陸奥国の蝦夷が反乱を起こし、救援に赴いた武蔵国の軍士を奈良神が守護する（『日本文徳天皇実録』嘉祥3年5月丙申（19日）条）。
和銅元年　（708）	9月	越後国に出羽郡を設置する。
和銅2年　（709）	3月	陸奥・越後国の蝦夷征討のため兵を徴発し、巨勢麻呂を陸奥鎮東将軍に、佐伯石湯を征越後蝦夷将軍に、紀諸人を同副将軍に任じ、節刀を授ける（8月に帰還、9月に賜禄）。
	7月	諸国の兵器を出羽柵に運ばせる。
		越後・佐渡など4か国の船100艘を征狄所に送らせる。
和銅3年　（710）	1月	隼人・蝦夷が朝賀に参列、16日に授位・賜禄あり。
	4月	公民となることを申請した陸奥の蝦夷に、君の姓を賜い、戸籍に編入する。
和銅5年　（712）	9月	出羽国を設置する、翌月陸奥国の最上・置賜郡を編入する。
和銅6年　（713）	12月	陸奥国に丹取郡を設置する。
和銅7年　（714）	2月	出羽国に養蚕を行わせる。
	10月	尾張・上野・信濃・越後の人々200戸を、出羽柵戸として移住させる。
霊亀元年　（715）	1月	蝦夷・南島人が朝賀に参列、15日に授位あり。
	5月	相模・上総・常陸・上野・武蔵・下野6国の富民1000戸を、陸奥国に移住させる。
	10月	陸奥国の香河・閉村の地に郡を設置し、居住する蝦夷を戸籍に編入する。
霊亀2年　（716）	9月	陸奥国の置賜・最上郡を出羽国に編入し、信濃・上野・越前・越後4か国の人々各100戸を出羽国に移住させる。
養老元年　（717）	2月	信濃・上野・越前・越後4か国の人々各100戸を出羽柵戸として移住させる。
養老2年　（718）	5月	陸奥国の石城・標葉・行方・宇太・伊理5郡と常陸国の菊多郡を分けて石城国を、また陸奥国の白河・石背・会津・安積・信夫5郡を分けて石背国を設置する。
	8月	馬1000頭を進上した出羽・渡嶋の蝦夷に位を授け、禄を賜う（『扶桑略記』）。
養老3年　（719）	7月	東海・東山・北陸道などの人々200戸を出羽柵に移住させる。
		按察使を設置する。
	閏7月	石城国に駅家10か所を設置する。
養老4年　（720）	1月	渡嶋津軽津司諸君鞍男らを靺鞨国に派遣し、その風土・習俗を視察させる。
	9月	蝦夷の反乱により按察使上毛野広人が殺される、翌年4月征夷将軍・鎮狄将軍らが帰京、翌々年4月陸奥蝦夷征討の功労者に勲位を授ける。
養老5年　（721）	8月	出羽国を陸奥按察使に管轄させる。
	10月	陸奥国柴田郡の2郷を分けて苅田郡を設置する。
養老6年　（722）	8月	諸国から1000人を選び、柵戸として陸奥鎮所に移住させる。
養老7年　（723）	9月	功績のあった出羽国の蝦夷を賞して爵を授ける。
神亀元年　（724）	3月	海道の蝦夷の反乱により陸奥大掾佐伯児屋麻呂が殺される、11月征夷持節大使藤原宇合・鎮狄将軍小野牛養が帰京する、翌年閏1月征夷将軍らに勲位などを授ける。
		この年 大野東人が多賀城を造営する（「多賀城碑」）。
神亀5年　（728）	4月	陸奥国に白河団を設置し、丹取団を玉作団に改める。

※特に断らない限り出典は『続日本紀』

平成25年度鞠智城跡「特別研究」研究成果報告会　2014年3月8日
（土）

日本における古代山城の変遷—とくに鞠智城を中心として—

お茶の水女子大学大学院博士後期課程
古内　絵里子

はじめに

古代山城は、白村江の敗戦後、対外防衛のために西日本各地に造られた軍事施設である。その研究は膨大だが、七世紀以降の古代山城の役割と変遷については、今日までほとんど言及されていない。そこで本報告では、①七世紀以降の古代山城の役割と変遷、②なぜ平安時代まで古代山城が存続したのかという問題を論じていく。

1．古代山城の存続期間

約30～50年…高安城（大宝元年（701）廃城）・茨城・常城（和銅5年（712）廃城）・屋嶋城・金田城・三野城・稲積城・鬼ノ城・御所ヶ谷山城・永納山城・帯隈山城・おつぼ山城

⇒外国から侵略の脅威の減少が八世紀前半の廃城の要因

70年以上…基肄城

200年以上…大野城・鞠智城

⇒なぜ、この二城だけ長期間存続したのか？

・大野城は、眼下に大宰府があることから府の非常時の逃げ城として存続。

・鞠智城は大宰府からおよそ60㎞南に位置し、菊池川河口からおよそ20㎞遡った内陸部に築かれている。城から有明海を臨むこともできない。

→西海道の情勢が存続に大きく関わったと考えられる。

2．八世紀における古代山城

(1) 八世紀の古代山城

・養老軍防令53城隍条、『類聚三代格』巻18・天長三年（826）十一月三日太政官符「大野城修理等、旧例皆以二兵士一宛」→軍団兵士が大野城を修理

・『類聚三代格』巻18・貞観十八年（877）三月十三日太政官符「此城（＝大野城）衛卒卌人」→八世紀には兵士が山城に上番

史料1『万葉集』巻8—1427

（前略）

右、神亀五年戊辰、大宰帥大伴卿之妻大伴郎女遇レ病長逝焉。于レ時、勅使式部大輔石上朝臣堅魚遣二大宰府一、弔レ喪并賜レ物也。其事既畢、駅使及府諸卿大夫等共登二記夷城一而望遊之日、乃作二此歌一。

→都からの特別な使者の歓待の場を大宰府がある筑前国の山城ではなく、肥前国にある基肄城にしている。

史料２ 大宰府政庁跡不丁地区出土木簡

・**為班給筑前筑後肥等国遣基肄城稲穀随**大監正六上田中朝口ニ

264,34,6　011

→天平年間に筑前・筑後・肥という国の領域を超えた広範囲に基肄城の稲穀を支給
基肄城の稲穀は、肥前国ではなく大宰府が把握していた可能性が考えられる。

史料３『続日本紀』文武二年（698）五月甲申（25 日）条

令二大宰府繕一治大野・基肄・鞠智三城一。

→大宰府が管内の山城の修繕を行う。

国に比べ大宰府の方が基肄城に対して干渉・把握度合いが大きかった。

(2) 八世紀の鞠智城

Ⅰ 鞠智城と養老四年（720）の隼人の反乱

・大隅国守殺害という事態に対し、１万の征隼人軍を派遣、１年以上現地に駐屯。

・鞠智城は、『延喜式』以前の古い駅路である「車路」が肥後国府を通り薩摩国に至る道と豊後国を抜けて日向国に至る道の分岐点付近に位置する。【鶴嶋 2011】
　→征隼人軍はルート的に鞠智城付近を通過

・古代山城は、逃げ城―避難所であり、膨大な食料が備蓄。

・鞠智城跡からは多数の倉庫跡や炭化米・アワ、「秦人忍□（米ヵ）五斗」と記された荷札木簡などが検出。

養老四年の反乱の際、大宰府の命により城内の備蓄物が用いられる。

Ⅱ 鞠智城の構造

古代山城（大野城・基肄城など）

・大小の谷が複雑に入り組む小峰を多く含み、城内の高低差が著しい。

・まとまった平坦面がなく、尾根上に建物が分散。

鞠智城

・城内に広大な平坦部を有し、数十棟の建物がまとまって置かれる。

・倉庫などの建物を必要に応じて増やすことが可能。

⇒他の古代山城にはない構造も存続した要因の一つ

逃げ城である古代山城は膨大な稲穀等の備蓄物を有し、それらは大宰府の指示に基づいて使用できる府の財源であった。特に、鞠智城は一番南端の大宰府直轄の施設であり、交通の要所に位置し、城内に広大な平坦面を持つなどの特質があった。このような特質が養老四年の隼人征討の際に発揮され、八世紀前半以降の存続を決定付けた。

3．九世紀における古代山城

(1) 九世紀の古代山城

・天長 3 年に西海道の軍団兵士制が全廃し選士・衛卒制に移行→山城には衛卒が常置。

・城庫周辺に百姓が暮らしており、大野城を往復して衛卒の粮米を売買していたが、貞観 12 年以前以降、府庫に粮米が納められるといなくなり、衛卒自身が往還しなければならず、城の守りがなりたたないので再び粮米を城庫に納めて欲しいことを願い出て許される。(『類聚三代格』巻 18・貞観十八年三月十三日太政官符)

→九世紀においても大宰府は大野城を維持しようとしていた。

『類聚三代格』巻 18・貞観十二年五月二日太政官符、『延喜交替式』157 条

→大宰府司が交替時に大野城の器仗の点検・修理を行う。

十世紀前半においても大野城は器仗を保有

史料 4『文徳天皇実録』天安二年（858）閏二月丙辰（24 日）／丁巳（25 日）条

肥後国言、菊池城院兵庫皷自鳴。／又鳴。

史料 5『文徳天皇実録』天安二年六月己酉（20 日）条

大宰府言、（中略）**又肥後国菊池城院兵庫皷自鳴。同城不動倉十一宇火。**

史料 6『三代実録』元慶三年（879）三月十六日丙午条

又肥後国菊池郡城院兵庫戸自鳴。

史料 4～6 から鞠智城は九世紀後半でも兵庫が置かれていた。

九世紀になっても大野城と鞠智城は軍事施設としての機能を保持していた。

（2）九世紀の鞠智城

九世紀初頭に隼人の内地化が完了→鞠智城の性格の変化があった。

I 九世紀の鞠智城の性格の先行研究

菊池郡家説

・八世紀末以降、正倉神火事件が頻発し、政府はその対応策の一環として、旧来の倉庫群とは別の地に新たに倉庫群を建設する政策をとる。

→この時期、軍事施設としての鞠智城の庁舎や倉庫群が、菊池郡家の政庁や正倉としての機能を併せもつようになった可能性が考えられる。【笹山 2010】

・「菊池郡城院」という表記は、九世紀の鞠智城が菊池郡家の機能を併せ持った可能性を示唆しており、一般に郡家に置かれる「不動倉」と併せて注目される。【鈴木 2010】

山城の倉庫化説

・九世紀代になると軍事施設である城としての役割は希薄となり、城内に多数の建物（倉庫）を有していることから非常時に備えての穀物を貯蔵する動倉、不動倉としての役割が強くなった。【石松 2007】

Ⅱ 国際関係の緊張と古代山城

新羅の国力低下に伴い、新羅の海賊が西海道に来ることが頻発。

承和 9 年(845)　大宰大弐藤原衛の新羅人の越境禁止の奏上が認められる。

貞観 11 年(870)　新羅海賊が博多津に来襲し、豊前国の年貢絹綿を略奪。

貞観 12 年　筑前権史生佐伯真継が大宰少弐藤原元利万呂と新羅王の内通を密告。

白村江の敗戦以来、対外的脅威が著しく高まり、新海賊対策が相次いで行なわれた。

大宰府司が交替時に大野城の器仗も点検することを定めたことも（『類聚三代格』巻 18・貞観十二年五月二日太政官符）新羅海賊対策の一環

→大野城も対外的脅威に対応

寛平 5 年（893）には肥後国府のある飽田郡を新羅の賊が襲う。

→九世紀の肥後国も新羅の脅威にさらされていた。

大宰府と有明海から離れている鞠智城の立地は、逆に外敵から侵入され難いという利点となった。

西海道情勢から、九世紀になっても鞠智城は郡家もしくは別院になったとは考え難く、軍事施設、すなわち古代山城としての性格を維持していた。また、新羅から賊の来襲が多発したことにより対外的危機感が高まった九世紀は、再び古代山城の必要性が強まった。

おわりに

九世紀以降も存続した大野城と鞠智城は逃げ城として使用されることは一度もなかったが、一貫して古代山城として機能し続けた。そして、めまぐるしく変化する西海道情勢なかで、その役割は果たしたと考えられる。しかし九世紀以降、大宰府の衰退にともない次第に機能が低下していった。

《参考文献》

・石松好雄「大宰府と朝鮮式山城」（中尾芳治ほか編『古代日本と朝鮮の都城』ミネルヴァ書房、2007 年）

・岡田茂弘「古代山城としての鞠智城」（笹山晴生編『古代山城、鞠智城を考える―2009 年東京シンポジウムの記録』山川出版社、2010 年）

・笹山晴生「鞠智城と古代西海道」（笹山晴生編『古代山城、鞠智城を考える―2009 年東京シンポジウムの記録』山川出版社、2010 年）

・鈴木拓也「文献史料からみた古代山城」（『条里制・古代都市研究』26 号、2010 年）

・鶴嶋俊彦「古代官道車路と鞠智城」（鈴木靖民ほか編『古代東アジアの道路と交通』勁勉出版、2011 年）

【論文要旨】

古代肥後における仏教伝来
―百済達率日羅と鞠智城出土遺物を中心として―

有働智奘

一般的に6世紀における仏教伝来の経路は、対馬・壱岐、九州北部、瀬戸内を推定している。しかし実際は、百済聖明王による仏教公伝の使者や伝道者が、どのような経路で畿内に伝えたかは明確ではない。

ところが、6世紀前後における九州中部、つまり肥国（肥前・肥後）の状況を確認すると、百済との関係が強い。したがって、当時の百済との交流は主に九州中部を通じていたことが考えられた。その根拠として、鞠智城を含めた菊池川流域の出土遺物から百済との関係が指摘でき、『日本書紀』に記す葦北国造の子「日羅」、及び百済僧の道欣、恵彌等からも百済の交流がみられた。

特に注目できることは、大野城や鞠智城が造営される以前において日羅が大和王権に対し、要塞を築城するという国策を進言したことである。また、九州から畿内へ仏教が伝来した経路は豊国（豊前・豊後）地域を始点とすることが考えられた。その地域における政治と宗教の関係として着目できるのが、八幡信仰である。その八幡信仰は渡来人（秦氏）の信仰と関連し、さらに彼等が流布させた仏教は新羅仏教ではなく、百済仏教であった。彼等が信奉した八幡神は、対新羅、隼人の守護神として登場し、鞠智城等と同様な出現形態であった。

また、仏教文化が最初に伝わったと考えられる肥国には飛鳥時代前半の仏教遺物や遺構があまり見られなかった。その理由として、出雲と同様に肥国の場合は国造の宗教的権威が強く、古代肥後における神祇信仰をふまえると、在地氏族への仏教受容は難しい問題であった。律令制に至るまでの古代肥後における信仰をみると、当時の信仰形態は在地不介入な側面があるため、渡来系の氏族の信仰に先住氏族が介入する様相が考えられない。そのため、渡来系氏族の個人的信仰として仏教が受容され、徐々に先住民に浸透したと考えられた。

したがって、6世紀における朝鮮半島の仏教文化の到来地は、有明海地域を中心とする肥前、肥後地域の可能性が高いと考えられた。

古代山城出土唐居敷から見た鞠智城跡の位置づけ

小澤佳憲

鞠智城跡についてはこれまで多くの研究者が、白村江の敗戦を受けて列島の守りを固めるため西日本の各所に作られたことが史書に記録された６城とほぼ同時に作られたと考え、これらとともに朝鮮式山城の一つに数えてきた。しかし、他の６城が史書に７世紀後葉における築城記録を持つのに対し、鞠智城跡の史書における初出は 698 年における修築記事(大野城跡・基肄城跡とともに)であり、他の６城とは異なり築城記録がみられないため、築城の時期については諸論あった。また、出土遺物の検討から築城期を探る試みもなされてきたが、鞠智城が成立する直前まで同じ地に古墳時代後期集落が営まれていたこともあり、明確な答えを用意するまでには至っていなかった。

そこで、土器以外の考古資料として築城に用いられた技術を他の古代山城と比較することで、築城期を検討することとし、具体的には城門の扉回転軸を固定するための施設である「唐居敷」の形態を手がかりとして比較検討を試みた。

鞠智城跡の石製唐居敷は深迫門、堀切門、池ノ尾門の３つの門跡から見つかっている。それらを詳細に検討した結果、①深迫門・池ノ尾門例は城門主柱が礎石の上に乗る礎石建ち構造の唐居敷で、他の朝鮮式山城にはみられず、「鞠智城型」に分類される②堀切門例は主柱刳込を伴い、基肄城跡東北門例と同じ「基肄城型」に分類される③唐居敷の最も重要な部分である軸摺穴をみると、形態や調整などの特徴が他の朝鮮式山城(初築時)の唐居敷軸摺穴と共通する④大野城跡ではその後軸摺穴が別のタイプに変化している、といったことがわかった。

以上から、鞠智城は史書に築城記録の残る他の朝鮮式山城と同じ技術体系で作られており、朝鮮式山城の類型に含まれること、従って築城の時期もこれらとほぼ同じ頃と考えられることを指摘した。

朝鮮式山城の外交・防衛上の機能の比較研究からみた鞠智城

柿沼亮介

古代山城は金田城から高安城まで、そのほとんどが対馬、大宰府周辺、瀬戸内海沿岸に集中しており、これは８世紀における外交使節の入境経路と一致している。しかも、多くは急峻で眺望にも優れた山の頂上付近に設置された。このように多くの古代山城は防衛を意識して設置されたが、一方で鞠智城は、他の山城と比較して低い位置に設置されており、しかも有明海を監視するのに適しているとは言い難い。つまり、鞠智城の設置には、防衛戦争に直接的に備えるのとは別の理由があると考えられる。その点について、外交使節の入境経路や、ヤマト王権による外交権の確立過程から考えてみたい。

古代における外交使節は、大宰府→瀬戸内海→難波という経路で入境していた。大宰府や難波では様々な外交儀礼が行われて、また、入京を認められるか否かの判断を待つ場ともなった。しかしこの経路は、加耶や朝鮮三国（高句麗・百済・新羅）、さらに統一新羅との外交においては用いられていたと考えられるものの、新羅と対立状態にあった渤海は用いることができなかったと考えられる。それにもかかわらず、８世紀後半に、渤海使がこの経路をとらなかったことを日本が詰問している事例が存在する。そしてその中で、大宰府ルートのことを「旧例」「古例」としているのである。このことは、何を表しているのであろうか。

そもそも大宰府や博多は、朝鮮半島から日本に渡る際に、初めに来着する地ではない。対馬、壱岐と渡海した外交使節はまず、東松浦半島の先端付近に来着したと考えられる。それにもかかわらず福岡平野と筑紫平野の結節点に大宰府が置かれたのは、ヤマト政権が外交権を確立するにあたって、それまで朝鮮半島との独自の外交ルートを築いていた玄界灘沿岸の勢力や有明海沿岸の勢力を掌握することが重要であったからであると考えられる。鞠智城も同様に、直接的な対外防衛というよりも、肥後の勢力を抑える意味があったといえるだろう。鞠智城が他の山城と異なり８世紀以降も長く存続し、さらには新羅海賊の活動が活発化する９世紀後半に鞠智城から出土する土器の数も急増するのも、在地勢力による独自の外交を牽制する意味があったと考えることができる。

律令国家成立期における鞠智城
—「繕治」と列島南部の関係を中心に—

菊池達也

本稿は、律令国家成立期における鞠智城の役割について考察したものである。そのため、まず７世紀～８世紀初頭の列島南部に対する政策を、列島北部と比較しながら分析した上で、文武２年（698）に行われた鞠智城の「繕治」の目的を検討した。次に、人的活動の低下、建物構成の変化など、８世紀半ばに見られる鞠智城の様々な変化の要因について、同時期の列島南部に対する律令国家の政策に注目し、検討を加えた。その結果、明らかになったことは以下の２点である。

第一に、列島南部に対する強硬的な政策の準備として、鞠智城の「繕治」が行われたことである。このことは、①文武期が、列島南北に対する支配強化のために武力行使も辞さない強硬的な手段をとることが志向され、その準備を進めていた時期であったこと、②鞠智城とともに「繕治」された大野・基肄城が防衛する大宰府が、列島南部に対する兵站地としての役割を８世紀初頭に強めていたこと、以上の２点から考えることができる。

第二に、列島南部に対する強硬的な政策が放棄されたことにより、鞠智城の変化が起こったことである。８世紀初頭、列島南部では武力行使も辞さない強硬な政策が行われたことで、律令制度に基づく支配が前進した。しかしその後、大規模な交戦があった形跡が見られず、また、班田の実施があきらめられていることから、強硬的な政策が放棄されたことが読み取れる。こうした方針転換が起こった時期と鞠智城の変化が起こった時期が符合することから、鞠智城の変化が列島南部に対する政策の方針転換によって生じたことが考えられる。

以上のように、律令国家成立期における鞠智城は列島南部に対する政策ときわめて密接に関わっていた。このことから、この時期の鞠智城は列島南北に対する支配強化という国家的プロジェクトの中で考える必要があることを主張した。

日本における古代山城の変遷
—とくに鞠智城を中心として—

古内絵里子

古代山城は、白村江の敗戦後、対外防衛のために西日本各地に造られた軍事施設である。その研究は膨大だが、７世紀以降の役割と変遷については、今日までほとんど言及されていない。そこで本稿では、８世紀から９世紀以降の古代山城の実態と変遷、とくに鞠智城を中心に検討を行い、なぜ平安時代まで古代山城が存続したのかという問題を明らかにすることを試みた。

まず第１章では、朝鮮式山城を中心に古代山城の存続期間の再検討を行った。大部分の古代山城は、対外的危機が低下していった８世紀前半に廃城となり、30～50年間しか存続しなかった。しかし、大野城と鞠智城の２城だけは200年以上の長期間存続していたことを指摘した。

これを踏まえて、第２章では、８世紀の古代山城の実態を考察した。天平年間まで存続が確認できる大野城・基肄城・鞠智城は、大宰府の直接の管理下の施設であったことを論じた。また、古代山城の逃げ城という性格上、城内には膨大な稲穀等の備蓄物を有し、それらは大宰府の指示に基づいて使用できる府の財源であった。特に、鞠智城は一番南端の大宰府直轄の施設であり、交通の要所に位置したこと、城内に広大な平坦面を持つことなどの他の山城にみえない特質があった。そして、この特質により養老４年（720）の隼人征討の主要な補給基地としての役割を担い、このことが８世紀前半以降における存続の契機となったという見解を提示した。

そして第３章では、９世紀の古代山城の実態を検討し、鞠智城と大野城が依然として古代山城としての性質を保持していたことを明らかにした。とくに、この時期は新羅海賊出現の頻発による国際関係の緊張により、再び古代山城の必要性が強まった。しかし９世紀以降、大宰府の衰退にともない両城も機能が次第に低下していった。

以上、９世紀以降まで存続した大野城と鞠智城は逃げ城として使用されることは一度もなかったが、一貫して古代山城として機能し続けた。そして、めまぐるしく変化する西海道情勢のなかで、その役割を果たしたと考えられる。

この電子書籍は、鞠智城跡「特別研究」成果報告会 発表レジュメ集 2 を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、古代山城がある市町村教育委員会、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：鞠智城跡「特別研究」成果報告会 発表レジュメ集 2
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話： 096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：西暦 2022 年 7 月 1 日